様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24 年　5 月　15 日現在

機関番号：12601
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2010 ～ 2011
課題番号：22820010
研究課題名（和文）　パーリ註釈文献と北伝資料の比較分析による部派仏典の伝承史的研究

研究課題名（英文）　A Study of the Sectarian Buddhist Texts by Comparative Analysis of Pali Commentaries and Sanskrit, Chinese, and Tibetan Materials

研究代表者
馬場　紀寿（BABA NORIHISA）
東京大学・東洋文化研究所・准教授
研究者番号：40431829

研究成果の概要（和文）：
本研究は、初期仏教から部派仏教の過程で成阿羅漢／成仏の伝承がどのように展開し、そして、その変化がどのように大乗仏教へ影響したのかを明らかにした。

仏教の部派において、修行論を示す論書（*Saundarananda* など）は修行者が阿羅漢に成る直前に四諦を観察することを示すのに対し、仏伝（*Buddhacarita* など）は菩薩が仏陀に成る前に縁起を観察すると説く。この傾向は遅くとも二世紀に少なくとも北インドに存在し、遅くとも五世紀初頭にはスリランカに達した。そして、南アジアの多くの地域に広まり、少なくとも七世紀まで継続した。

三乗説にかんして、『法華経』などの大乗仏典は、四諦の認識を声聞の認識として位置づけ、縁起の認識を独（縁）覚の認識として位置づける。この新たな傾向は三世紀頃に始まったから、おそらく大乗仏典は修行論を示す論書と仏伝の傾向を批判していたと考えられる。

研究成果の概要（英文）：
This study elucidated how accounts of attaining Arhatship/Buddhahood developed from Early Buddhism to Nikāya Buddhism and how this shift influenced Mahāyāna Buddhism.

In Buddhist schools or sects (nikāya), soteriological works (*Saundarananda, Vimuttimagga* and so on) suggest that practitioners awaken to the Four noble truths just before they attain the Arhatship while the Buddha's biographies (*Buddhacarita, Dīpavaṃsa*, and so on) explain that the Bodhisattva gains the knowledge of the Dependent origination just before he attains Buddhahood. This tendency existed in North India as early as the second century, and reached Sri Lanka as early as the beginning of the fifth century. It spread over many parts of the South Asia, and continued to exist at least until the seventh century.

About three yānas, Mahāyāna scriptures like the *Saddharmapuṇḍarīka* defined the understanding of the Four noble truths as the knowledge appropriate to a Śrāvaka, and the Dependent origination as the knowledge appropriate to a Pratyeka-(or, Paccaya-)buddha. Since this new discourse started about the third century, probably Mahāyāna scriptures intended to criticize the tendency of soteriological works and the Buddha's biographies.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,210,000	363,000	1,573,000
2011 年度	1,110,000	333,000	1,443,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2,320,000	696,000	3,016,000

研究分野：　人文学
科研費の分科・細目：印度哲学・仏教学
キーワード：仏教、部派、仏伝、修行論

１．研究開始当初の背景

「初期仏教⇒部派仏教⇒部派と大乗の並存」という順序で展開するインド仏教において、部派仏教は、初期仏教から大乗仏教を繋ぐ要の位置にある。それにもかかわらず、従来の部派研究は、個々の部派に焦点を当て、一部派に固有な思想体系や文献の部派所属を論じる研究が中心だった。そのため、諸部派を横断して起こった変化を考察する試みは十分になされてこなかった。

２．研究の目的

本研究は、五世紀にスリランカで編纂されたパーリ註釈文献と五世紀以前にインドで成立した北伝部派資料（サンスクリット文献、漢訳資料、チベット訳資料）を比較研究することによって、「伝承史」という視点から五世紀以前の部派仏教を描き直すことを目的としている。

インドにおける部派仏教の歴史を解明するための資料としては従来注目されてこなかったパーリ註釈文献を取り上げ、北伝の部派文献と比較研究することによって、諸部派に共有されていた伝承を掘り起こす。さらに、それらの伝承が変容する歴史的過程を分析することによって、五世紀以前の諸部派の状況を新たな視点から明らかにする。

３．研究の方法

当研究は、パーリ註釈文献と北伝部派資料の読解に基づいて、五世紀以前に成立し諸部派に流通した諸伝承を特定し、それら諸伝承が歴史的に変容する過程を分析した。その際、個々の部派にだけ焦点を当てるのではなく、諸部派の文献を俯瞰できるよう、五世紀以前に成立した部派文献全体を調査し、諸部派に共通して起こった事象を取り上げて検討する。

パーリ註釈文献は基本的に Pali Text Society 版を用いるが、それ以外の版本（スリランカ版、ビルマ版、タイ版）や写本も適宜参照した。北伝資料は、公刊されたサンスクリット校訂本、大正蔵版の漢訳文献や北京版・デルゲ版のチベット文献を用いる。作業を効率化するために、パーリ文献、大正蔵、チベット仏典の電子データを利用し、検索機能を活用した。

４．研究成果

一年目に（１）、二年目に（２）の成果を得た。

（１）解脱にかんする伝承の変容

「伝承史」という視点から、五世紀以前の部派仏教の歴史を再検討した。

①　初期仏典における解脱にかんする伝承

初期仏典において解脱（成阿羅漢・成仏）に関する伝承は四禅を経て三つの明知（vidyā / vijjā）を得る四禅三明説、比丘が四禅を経て六神通（abhijñā / abhiññā）を得、最終的に「苦・集・滅・道」「漏・集・滅・道」を認識して解脱する四禅六通説、菩薩が十支（ないし十二支）縁起を認識して仏陀と成る縁起成仏説など複数存在していた。

②　部派文献における修行論と仏伝

部派文献においては、初期仏典における諸伝承が整理され、修行論を説く作品で修行者が四諦を認識して阿羅漢に成る過程が説かれ、仏伝作品で菩薩が縁起を認識して仏陀と

成る過程が説かれる。

この傾向は、二世紀の詩人、アシュヴァゴーシャ（Aśvaghoṣ a）の作品（*Saundarananda, Buddhacarita*）に確認できるから、諸部派の成立後、遅くとも二世紀に、少なくとも北インドで存在した。そして、四世紀頃にスリランカに存在した作品（*Vimuttimagga, Dīpavaṃsa*）にも見出されるから、遅くとも五世紀初頭にはスリランカに及んだ。

説一切有部の『発智論』『大毘婆沙論』『雑阿毘曇心論』『倶舎論』、経量部系と考えられる『成実論』は四諦の観察を中心とした修行体系を説くのに対し、所属部派不明の『修行本起経』『過去現在因果経』『仏本行集経』、*Lalitavistara* といった仏伝作品や上座部大寺派の *Jātakaṭṭ hakathā*（仏伝をまとめた Nidānakathā）は三明説に縁起成仏説を組み合わせた様式でブッダの悟りを説く。部派の論書や仏伝作品に広く確認できることから、この新たな傾向は、部派を越えてインド各地へ広まり、少なくとも七世紀までインドで継続していたと考えられる。

③　大乗仏典における三乗説

『法華経』等の大乗仏典は、三乗説において、〈四諦〉を声聞の認識（声聞乗）として捉え、〈縁起〉を独覚の認識（独覚乗）として捉えた。この三乗説の特徴は、声聞、独覚、菩薩が同じ修行内容に基づくのではなく、「四諦」「縁起」「波羅蜜」というそれぞれ別個の教説を修行するという点にある。

三乗説そのものは部派文献に見出されるものであって、大乗に特有ではないが、上記のように、声聞に四諦を、独覚に縁起を割り当てる三乗説は、部派文献には存在しない。この点で大乗仏典の三乗説は部派文献にない新しい形式を具えているのだが、この問題を扱った先行研究は存在しなかった。

ここで、本研究の成果（4, (1),①②）を踏まえるなら、部派文献における二種の認識と大乗仏典の三乗説の間には明確な対応関係が見て取れる。そして、前者を踏まえて後者が作成されたと想定するならば、『法華経』等の大乗仏典は、修行者が四諦を認識して阿羅漢と成る過程（修行論を説く作品）を「声聞乗」として捉え、菩薩が縁起を認識して仏陀と成る過程（仏伝作品）を「独覚乗」として捉えたことになる。

このような解釈は大乗を認めない者にとっては不当なものだったに違いないが、それが複数の大乗仏典に広まったことには相応の理由がある。声聞（śrāvaka）は弟子を意味するから、阿羅漢を目指して四諦を修習する仏弟子を声聞乗に配したことは不自然ではなかっただろう。また、Gāndhārī Prakrit で独（pratyeka）と縁（pratyaya）がともに prace’a となることを考えれば、縁起を悟る仏陀を独覚＝縁覚（縁起を悟った者）と呼んだのも納得がいく。

この種の三乗説は、すでに竺法護訳の経典（『大宝積経』密迹金剛力士会）に確認できるから、成立の下限年代は三世紀である。大乗仏典は三乗説の中に部派文献における仏陀の智慧と菩薩の智慧を批判的に組み込んだと考えられる。東アジアでは特に羅什訳の『法華経』と『大智度論』を通して声聞と独覚の意味を決定づけることとなった。

（２）スリランカの『金剛頂経』

スリランカの上座部（大寺派）で編纂された文献に説かれる「非仏説」の記述に焦点を当て、それに関連する北伝資料を調査することによって、密教経典として有名な『金剛頂経』が中世スリランカに存在していたことを明らかにした。その論拠は以下の三つにまとめられる。

第一に、五世紀のパーリ註釈文献（『律註』『相応部註』）と十三、四世紀のパーリ文献（『核心綱要』『部派綱要』）には「非仏説（abuddhavacana）」とされる文献が挙げられており、後者は明らかに前者のリストを継承しているが、同時に前者に存在しない文献も多々挙げられる。その多くは密教文献に確定できるが、その一つに『タットヴァ・サングラハ』がある。これは漢訳『金剛頂一切如来真実摂大乗現証大教王経』、通称、『金剛頂経』の原題である。

第二に、七七四年、不空の没後間もなく建てられた「大広智三蔵和上之碑」によれば、開元二九（741）年、不空は弟子たちを伴ってスリランカへ渡り、普賢阿闍梨の下で学び、『金剛頂経』と『大日経』を授かって、天宝六（747）年に帰国したという。

第三に、スリランカから来たヴァジュラヴァルマンが『金剛頂経』の釈タントラの一つである『一切悪趣清浄タントラ』に対して著した注釈書がチベット訳で残っている。

以上のように、パーリ文献、漢訳資料、チベット資料のいずれもがスリランカと『金剛頂経』を結びつけており、本経はスリランカに存在したと考えられる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

① 馬場紀寿、阿羅漢の智慧と仏陀の智慧――初期仏典から大乗仏典へ――、日本印度学仏教学研究、査読有、Vol.59、No. 2、pp.190-196、http://ci.nii.ac.jp/els/110008609450.pdf?id=ART0009730844&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1335936866&cp=

〔学会発表〕（計１件）

① 馬場紀寿、仏陀の智慧と阿羅漢の智慧――部派文献の伝承史的研究――、日本印度学仏教学会、平成 22 年 9 月 10 日、於立正大学.

〔図書〕（計１件）

① 馬場紀寿、『大乗仏教の誕生』（第５章「上座部仏教と大乗仏教」）、p.33(pp.139-171)、平成 23 年 12 月.

６．研究組織

(1)研究代表者

馬場紀寿（BABA NORIHISA）
東京大学・東洋文化研究所・准教授
研究者番号：40431829